

第2話 非鉄金属王国 の苦難



非鉄金属王国の苦難

水銀の魔法により、なにがあっても変わらないゴールド女王の美しさを人間界のものたち（以後、人間という）に知らしめることはできたが、それでも彼らに知られるようになったのは数多くある非鉄金属の仲間たちのうちほんの一部にすぎなかった。また、その用途は主に祭祀用の道具の装飾が中心であった。人間界の歴史で『中世（5世紀～15世紀）』と言われる時代になっても、非鉄金属界の仲間はそれほど増えず、種類はまだ20元素ほどであった。



非鉄金属王国の屋台骨である銅将軍は、かつて錫と合体し青銅として活躍していたころの勢いをなくし、今では亜鉛と合体し、真鍮しんちゅうという貴重な材料となって活躍していたが、それでも大きな存在感を示せずにはいた。

非鉄金属王国の仲間たちは、大量に使用されている鉄には勝てず、金属の活躍の場の中心は新しい勢力である鉄王に取って代わられてしまった。



他の非鉄金属の仲間は、あいも変わらずイオウや酸素に体の一部を固定され、動きが鈍いままだったが、魔法使いの水銀だけは、比較的簡単に形態を変えることができるため、特殊な存在として一目置かれた形になっていた。

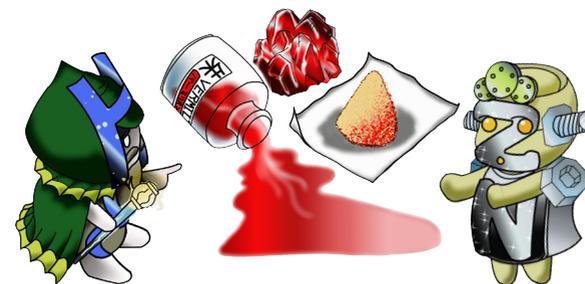


魔法使いの水銀は、

私はゴールド女王だけでなく、多くの非鉄金属王国の仲間を自分の体に一体化し、場合によっては解かし込むことができるのだ。イオウでさえ取り込み、それは人間に宝物扱いされているのだ。

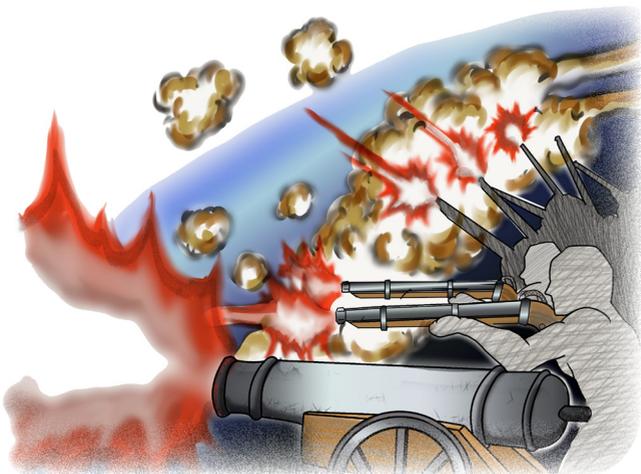
と言いたい放題であった。

実際うまい具合にイオウを取り込んだ水銀は、薬や赤い塗料として人間界で重宝されていた。また、現代では嫌われているヒ素を取り込んだこともあった。



非鉄金属王国の 夜明け

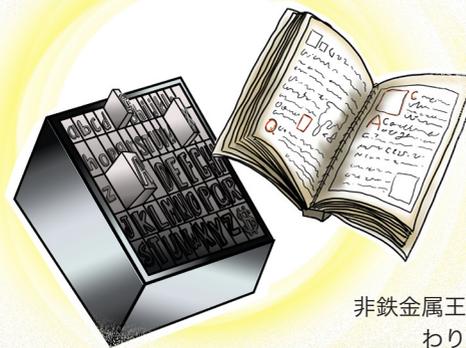
こんな状況がまたしばらく続き、人間界での時間単位で10世紀になるころ、東洋の大国で発明された爆発する粉を利用した武器が盛んに作られるようになった。金属界の鉄や青銅などが用いられ、それなりに人間界で活躍する仲間たちが増えていった。しかし、それは悲しくも、人間が争う「戦争」のために使われたのだった。



鉄王国でも非鉄金属界でも、「こんな使い方をされて、喜んでいいのかな」と互いに話していたが、人間は戦争をやめることはなかった。それからしばらくたった15世紀の半ばころ、非鉄金属界に画期的なインパクトを与える発見があった。盤面上の文字をインクを用いて紙の上に刷りうつす「印刷」(1)という技術を人間が発明したのである。

一度我々を利用して原版を作るとそれで何枚も同じ文書が手早くできるらしいよ。これを使えば、彼らの知識は正確に記録され、かつ多くの仲間たちに共有することができるから、「考える」ということがかなり楽になったらしい。

と錫。



非鉄金属王国内でも仲のいい友達が少なく、わりと孤立しがちだった学者の鉛が、

まあ、人間が我々の仲間を増やすのに協力してもいいけど、非鉄金属王国が他の王国や人間界でやはり素晴らしいものだとして尊敬されることが一番だ。



といったのを聞いていて、銅将軍は、
まずは我々全体の評価を挙げてくれないと、人間界に協力はできないぞ。

ときっぱりと釘をさした。

鉛は、



人間界には賢いものもいるので、彼らに我々の秘密をこっそり教えよう。それを印刷技術を使って『本』にして広めればいい。

と言った。

KEYWORD
鉛博士
の
「これってなに？」



1 活字金属

印刷で使用される金属はドイツ出身の金属加工職人ヨハネス・グーテンベルクが発明したもので、「活字金属」と呼ばれる。鉛、アンチモン、スズの合金で出来ている(主成分は鉛)。重要なことは、低温で融ける成分であること、外枠の形にそって早く流れて、形ができやすいこと、そしてもう一つ、融けている状態から固まるときに体積が大きく縮まないこと。成分の割合を変えることで、これら3つの性質が変わるため、場合によって作り分けていた。

